

#### 4.23 躑躅の毒

私の家の周りは、すっかり染井吉野が散ってしまったのですが、でもまだ少しだけ赤い萼が残っていて、全体としては余り美しいとは言えない景色です。

でも、代わって八重桜のぽっちゃりした花が雲のように咲いて、その根元にはツツジが明るい紅紫、ピンク、絞りの花を咲かせています。

ツツジは、漢字では「躑躅」という大変難しい、おどろおどろしい字が宛てられています。これは、「てきちょく」と読みます。

二つの字ともに、足偏が付いていることからわかりますように、この「てきちょく」は、よろよろと二、三歩行っては止まり、足踏みし、躓きながらよろめき歩くことを言います。

それがどうして「ツツジ」と関係あるのかって？

これは、平安時代に伝えられた中国の「シナレンゲツツジ」に由来するのですが、「羊躑躅」と書くシナレンゲツツジは猛毒で、この花を食べた羊が「てきちょく」して死んでしまうため、日本では古くから、およそツツジは毒がある食べてはいけない花なのだと考えられていたためだと言われています。下の写真は「シナレンゲツツジ」



今は、日本で咲いているツツジは、「レンゲツツジ」を除いて、無毒なことがわかっていますが、可哀想に、いったん毒のある「躑躅」のレッテルを貼られた「ツツジ」は今もまだ、漢字の上では、毒ありの汚名が付いたままになっているのですね。

どうですかね。

カワイソーじゃありませんかね。

え、美しい花には毒があるのは当たり前って？

まあね、経験がないわけじゃあないんですがね。

でもね、私思うんですが、長い間罪を着せてきた植物学者さんの子孫の皆様方、無実が判明した以上、「ツツジ」を「躑躅」と書くのを止めて、例えば「筒紅花」とか「綴咲花」とか美しい名前を贈った方がいいんじゃないですかねえ。

ところで、「ツツジ」と「サツキ」は、どう違うのかっていうのは、よく言われますよね。

実は、サツキは「サツキツツジ」の略でツツジの一種の名前なんです。

ツツジは種類が多く、数百種のツツジがありますが、私たちがよく見るツツジは「大紫ツツジ」というもので、花が大きくあでやかです。下の写真



これに対して、サツキの方は、花が咲く時期が遅く、花も葉もずっと小さいので、並べてみるとすぐわかります。



花が咲いていない時でも、ツツジの方は、葉に光沢が無く、ざらざらしていて、落葉しますが、サツキの方は、葉に光沢があり、常緑です。

と説明してみたものの、最近では、掛け合わせの栽培品種が沢山出てきて、どっちか分からないものもあるから、そろそろ区分すること自体無意味になりつつあるような気がします。

ただ、昔の文章を読むときに気にしておくくらいですね。

サツキツツジは、江戸時代に生まれたものだから、古代の歌にはもちろん登場しません。ですから、万葉集などはすべてツツジ。

万葉集にはツツジを詠んだ歌が9首あります。

比較的知られているのは、柿本人麻呂さんの長歌の中に「…つつじ花にほへる少女…」(巻13-3309)とありますが、これは、赤いツツジが若さと美しさのシンボルとして詠まれているケース。

ちょっと待って。

ツツジって匂う？

匂いませんよね。

昔、これ変だなあと思ったのですが、一応、そのときは燃え立つような赤の状態を「匂う」と表現したという解釈に、そういえば、第三高等学校寮歌「紅もゆる」でも、「さみどり匂

う岸の色」とあったなあ、と納得した覚えがあります。

万葉集には、赤いツツジ以外に、白いツツジが三首、岩ツツジが二首あるのですが、赤いツツジに比べてこれらはひどく暗い感じがします。

白ツツジの歌をあげますと、

(川鍋宮人、姫島の松原の美人〈をとめ〉の屍を見て、哀慟〈かな〉しびて作る歌)

風速(かざはや)の 美穂(みほ)の浦(うら)みの 白ツツジ 見れどもさぶし 亡き人思へば

ついでに、古今集の岩ツツジ。

思ひいづる ときはの山の 岩つつじ 言はねばこそあれ 恋しきものを

(拙訳)

(御室常盤山に岩つつじが咲きました。この花を見るたびに、心の中であなたを思い出して、今でも恋しく思うこの頃です。)

(このうた懸詞が二つもあって訳しにくい)

赤ツツジと違って、どちらも急に淋しい歌になりますね。

そういえば、うちの周りは、赤とピンクだらけ。

皆様の周りはどうですか？

## 5.1 石楠花

今年はどういうわけか花の咲く時期が例年と違い、梅はかなり遅く、桜は早く、なんだか肌で感じる気温と一致しなくて戸惑うことが多いこの頃です。

そんななかで、シャクナゲは例年よりかなり早く、あ、蕾がふくらんでいるなど思ったばかりなのに、もう満開です。

シャクナゲは、ツツジの仲間で、ツツジとよく似た花を付けますが、枝の先につく花の数がツツジと比べて格段に多いので、大変華やかで豪華に見えます。

日本固有のシャクナゲには、アズマ、キバナ、ホソバ、ツクシ、ハクサンといった種類があって、私が数年前まで住んでいた宮城県にも栗駒山の中腹、花山にアズマシャクナゲの自生群落地があり、天然記念物に指定されていました。

日本石楠花の花の色は、薄いピンクか白。キバナ石楠花は、勿論黄色。

写真（アズマシャクナゲ 自分が写したものではありません）



日本シャクナゲは、深山幽谷にひっそりと咲き、昔は余り人の目に触れることもなく、幻の花と言われていたのですが、最近では改良されて平地でもみられるようです。

石楠は 寂しき花か 谷あいの 岩垣淵に 影うつりつつ （島木赤彦）

シャクナゲに「石楠花」という字を当てたのは、貝原益軒さん。

なぜ医者が命名？

石楠花は、その葉が強い毒を持ち、利尿剤や強壯剤として用いられていたのですが、古代名の「さくなむさ」という名前が呼びにくかったのでしょうかね。

ところで、今日、私たちが普段よく目にするのは、西洋シャクナゲ。

こちらの方は、19世紀後半にイギリス人がヒマラヤから持ち帰って普及させたものです。シャクナゲは、ネパールの国花で、高さが20mを超える大木が至るところにあるようで、最近、これを見に行くヒマラヤトレッキングが流行っているようですね。

ヨーロッパに持ちこまれたシャクナゲは、オーストリア貴族のメッテルニッヒ侯爵などによって改良され（メッテルニッヒという名前が付けられた品種もあります）、それが明治期に日本にも輸入され、華族の庭園を彩るのですが、最近では、その華やかな花の色が好ま

れて、至る所で見ることが出来るようになりました。

我が家の近くでも、かなり植えられていて、5月のはじめに、真紅のものをはじめとして様々な色のシャクナゲを見ることが出来ます。日本石楠花に比べると、西洋シャクナゲは派手なものが多いですね。 写真（私が撮ったものではありません）



残念ながら、私の周りでは既に咲き終わっているために自分で撮った写真を載せることができないのですが、日本石楠花と違って、丈夫で栽培しやすいこともあって、最近急速に個人の庭の木にも見られるようになりました。

ちなみに、日本石楠花なのか、西洋シャクナゲなのかは、葉の裏を触ると分かります。日本石楠花の葉は、葉裏に薄い毛が密生しているのですが、西洋シャクナゲの葉裏はスベスベです。

石楠花の木は、非常に堅く、全く伸び縮みしないそうです。このため、わが国では、最高級の物差しに使われていたそうです。残念ながら、我が家の物差しは、竹でできていましたけれど。

今でも、石楠花の杖は、杖の中でも最高級品。これを使えば長生きできるそうです。どうです 一本？  
まだ、杖の世話にはならない！  
あ、それは失礼しました。

最後に、日本石楠花を歌った「拾遺和歌集」の歌。

**紫の 色には咲くな 武蔵野の 草のゆかりと 人もこそ見れ** （巻9 雑下 如覚法師）

この歌、どこに石楠花が詠われているのか分かりますでしょうか。

### 5.3 八十八夜

♪ 夏も近づく 八十八夜 野にも山にも 若葉が茂る

あれに見えるは 茶摘みじゃないか 茜禱（あかねたすき）に菅の笠

注：菅は「すげ」で「かん」でも「すが」でもありません。念のため。

昨日 5 月 2 日は、立春から 88 日目。

京都の宇治田原では、茶摘みが最盛期です。



お茶の木は、大変生命力が強く、新芽を摘んでもまた出てきますので、1年に3回茶摘みができます。

八十八夜前後に摘まれるのが、一番茶。

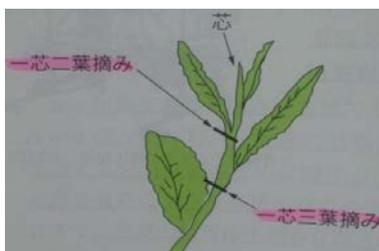
俗に「新茶」と言われていますね。

一番茶は、「うまみ」の素である「テアニン」を非常に多く含んでいて、甘く、栄養価が高く、リラックス効果や抗ストレス効果があり、しかも、これを飲むと脳溢血にならないと昔から言い伝えられてきています。

実際、脳溢血防止の効果があることが最近の研究で確かめられていますから、昔の人はよく知っていたものだなあと感心してしまいます。

一番茶の新芽の先端 2 枚を摘んだものは、「二葉摘み」といわれ、日本茶の最上級品として扱われます。

3 枚芽までを摘んだものは「三葉摘み」といわれ、煎茶の上級品とされています。



紅茶の場合もよく似ているようで、二葉摘みに相当するものは「フラワリー・オレンジ・ペコウ」と呼ばれます。

その下の若葉は「オレンジ・ペコウ」といいますから、これは「三葉摘み」の上級品。

その下は「ペコウ」、「スーチョン」と続きます。



日本では、「オレンジ・ペコ」と言われていますので、ときどき、オレンジ色したペコちゃん？って思っている人もいるみたいです。



「ペコウ (PEKOE)」は、「うぶ毛」を意味する中国語「PAK-HO」から来ており、「オレンジ (ORANGE)」は、オランダの王朝「ORANJE NASSAN」オレンジ公から来ています。

「ROYAL」という意味ですね。

さて、この新茶のあと、第2回目の茶摘みは、6月中旬頃から行われ、摘まれた茶葉は「二番茶」と言われます。煎茶にするのは、二番茶までです。

最後の三番茶は、7月中旬頃に摘まれますが、これは、番茶用。

「鬼も十八 番茶も出端」というフレーズを聞いたことがある方がおられると思いますが、これは、三番茶は、最初に淹れたものだけが美味しいという意味ですね。

ですから、「娘十八 番茶も出花」なんて、間違っても言わないようにしましょう。

ところで、茶摘みの歌の 2 番を聞いたことがありますか？

♪ 日和続きの 今日この頃を 心のどかに 摘みつつ歌う  
摘めよ摘め摘め 摘まねばならぬ 摘まにゃ日本の茶にならぬ

え？

なんかおかしい？

そう、この歌、もともとお茶の栽培が盛んな駿河など各地で歌われていたものを（例えば、「摘まにゃ駿河の茶にならぬ」など）、明治 45 年、文部省唱歌にしたときに「日本の茶」に変えたのですね。

これでこの歌は、当時の日本の代表的輸出農産品である生糸と並ぶお茶の輸出振興の歌に随ってしまったのです。

道理で、最近 1 番しか歌われないわけです。

さて、最後に、日本で販売されているお茶の北限は、岩手県陸前高田市の「気仙茶」だと思いますが、これは、伊達政宗が京都から持ち帰って宮城県石巻市桃生町で栽培に成功した「桃生茶（ものうちや）」の親戚。

東北地方で 400 年の歴史を持つ北限のお茶が、今回の津波で、絶えないことを祈るばかりです。

## 5.4 牡丹は男？

私の家の庭に牡丹の花が咲きました。 写真



「花の王」と言われているだけあって、やはり豪華です。

牡丹は、確かに絢爛豪華で花の王にふさわしいのだけれど、どこか日本的ではないところがあると思いませんか。

ちなみに、花の王と呼ばれるようになった初めも、中国の唐の時代でのこと。

なお、唐の時代の絶世の美人「楊貴妃」は牡丹と共にしばしば絵画に登場し、有名な「長恨歌」にも貴妃を牡丹にたとえている部分があると言われているのですが、私には、何度読んでもどこがそれに当たるかよく分かりません。

牡丹が日本に入ってきたのは、8世紀頃らしいのですが、万葉集には牡丹を詠んだ歌は一つもありません。

これはどうしたことなのでしょう。

これだけ人の目について、当時の先進国の唐でもて囃されているのに、万葉人は、こういう豪華なのは好みじゃなかったんでしょうか。

万葉でよく詠われている花は、梅とか桜とか藤とかですから、かなり雰囲気が違うのがね。

そういえば牡丹にたとえられる楊貴妃は日本では余り人気がなく、「雨に西施が合歡の花」の「西施」の方が人気が高いから、きっと日本人の心の根底に触れるところがないのでしょうか。

しかし、今では、「立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花」と言われて、美しい女性の代名詞のようになってますね。

でも、これが言われるようになったのは、江戸時代の天明年間からだから（「譬喩尽」）、18世紀の後半、田沼時代を経て、日本でも豊かで絢爛で円熟した文化が出現した後なのですね。

もっとも、このフレーズ、漢方薬的視点からは、腹が立てば芍薬を服用し、座ってばかりいて下半身が鬱血しているような女性には牡丹を飲ませ、歩く姿がふらふらして精神症の女性には百合の花を調合する処方箋を表しているという説もありますけどね。

ところで、「牡丹」が、女性にたとえられるのは変ではないのかと私は思うのです。

中国では、紅い牡丹が最高と言われているのですが、この紅い牡丹を種から育てても、必ず紅い牡丹の花が咲くものになるとは限らないようで、株分けによって増やすしかないそうです。

このため、赤い子ができない花→子ができない赤の花→雄の赤い花→牡の丹、となったそうです。

ハイ、ということで、牡丹は「牡」。

なんか納得できないって？

まあ、中国のことですしね。

ともあれ、牡ですから、花の「王」にはなれても「女王」にはなれないのですね。

ということだから、牡丹を女性に例えたり、楊貴妃を牡丹になぞらえたりするのは、近世以降の日本人の誤解ではないかなあ、と私は思うのですけどね。

もっとも、そんなことを言ったりしている変人はいないのですけど。

さて、その牡丹ですが、牡丹の別名は、「富貴草」、財産があって、位が高い花ということになっています。

でも、日本で余り貴い花というイメージがないのは、

「怪談牡丹灯籠」や

「唐獅子牡丹」

などのせいでしょうか。

「怪談牡丹灯籠」は、イケメン浪人萩原新三郎くんが、高禄の武家の娘「露」と互いに一目惚れしたのだけれど、その後、叶わぬ恋に「露」は衰死。その想いが幽霊となって新三郎くんのところに訪ねてきて、最後には新三郎くんが取り殺されるお話。

牡丹灯籠（提灯）は、露のお付き女中がふたりの足許を照らす妖しい灯りなのですね。

一方、ご存じ昭和残侠传「唐獅子牡丹」は、あくどいヤクザの仕打ちに我慢に我慢を重ねてきた我が「高倉健」様が、堪忍袋の緒を切って、抜き身を片手に殴り込むお話。

「背なで泣いてる」獅子の傍で咲き誇る豪華な牡丹が、任侠の王道を表しているのですね。

かっこよかったですねえ。

ポッポ屋の高倉健も良かったけど。



さて、私の好きな牡丹は、言わずと知れた「牡丹餅」。

牡丹餅は、こしあんが正統。お萩は粒あん。

こういう話について、語り始めると、それだけで紙数が何枚あっても足りなくなりますので、今日は、これでおしまい。

ちなみに、私は、「美味しければ、どっちでも構わない派」に属しています。

## 5.5 背比べ

♪ 柱のきずは おととしの 五月五日の 背比べ  
粽たべたべ 兄さんが 測ってくれた 背の丈  
昨日比べりゃ 何のこと やっと羽織の 紐の丈

この歌、私たちの世代の人間は、ほぼ間違いなく子供の時に歌ったことがあるはずです。

ご存じの方が多いと思いますが、この歌は、作詞者である早大生の海野厚が、自分の弟の立場に立って、書いたもの。

前の年の五月、故郷静岡に帰ることができなかつた海野が、少し大きくなつた6歳の弟春樹の背丈を測ってやっている光景が目につかぶ優れた詞と思います。

ただ、この歌詞には、昔からその意味を巡って二つの意見が対立しているところがあります。それは、「やっと羽織の紐の丈」という部分です。

第一説は、自分では背丈が伸びたと思っていたのに、2年経つても、やっと羽織の紐の長さ(大体10cm)しか伸びていなかったとする意見です。

第二説は、自分では背丈が伸びたと思っていたのに、やっと兄の羽織の紐の高さのところ(大体110cm)までしかいってなかったとする意見です。

つまり、2年間で伸びた分が10cmだと言っているのか、それとも2年間でやっと110cm程度の背の高さになったと言っているのかの違いですね。

この歌の解説を調べる限り、殆どの意見は、第一説を支持していますね。

あなたは、どう思っていました？

実は、どうも第一説でも、第二説でもない、思い違い説というのがあることを今回発見しました。

「羽織の紐」を「着物の帯」と勘違いして、やっと自分の着物の帯の長さにしかなかったとする意見？ です。

これ、私のところのアホな学生の意見ですので、……無視してください。

え、おまえはどう思っているのかって？

私は、第二説。

理由？

この歌詞のなかには「丈(たけ)」という言葉が二度登場しますが、普通「丈」という言葉

は、高さに関する長さを表す形で使うのが普通かと思うのです。  
最初に出てくる「背の丈」は、その典型的なケースですね。

もし、第一説を採れば、次に出てくる「紐の丈」の丈が、単なる紐の長さ（10 cm程度か）ということになるのに対して、第二説を採れば、大人の兄の羽織の紐の位置までの高さ（110 cm程度か）を示すこととなります。

私は、「丈」という言葉を一つの詩のなかで同時に使う場合、同じ意味で使うのが詩人の気持ちではないかと思うのです。

残念ながら、海野はこの後 28 歳で早世しますので、誰かが彼に聞く機会はありませんでした。

これは、私が向こうの世界に行ったときに聞きたいことの一つです。

ところで、私がこの歌でもう一つ面白いと思ったのが、「粽たべたべ」の部分。

ご存じかもしれませんが、端午の節句に粽を食べるのは、その昔（西暦前 278 年 5 月 5 日）、中国の楚の国の「屈原」が楚の将来に絶望して川に身を投げて死んだのを悲しんだ人々が、粽を川に流して彼を悼んだことから来ています。（蛇足ですが、長崎などで行われているドラゴンボート競争は、屈原を救おうと全力で船を漕いだのが起源と言われています。）

京都を中心に、日本でも端午の節句に粽を食べる習慣は、戦前まで広く関西にはありました。

端午の節句に食べるお菓子としての粽は、「御所粽」といわれるものですが、これは、保存食として作られている「灰汁（あく）粽」とは異なり、米粉を蒸したもの或いは外郎を笹で巻いたものですね。

京都で有名な「川端道喜」の水仙粽は、笹の中が吉野葛。大変美味しいのですが、端午の節句に子供達と一緒に食べるにはちょっと高すぎるのが難点です。でも、一度食べると、あの笹の香り。本当に良いものは、姿形も、味も、香りも忘れられなくなるのです。



ところで、この歌の舞台は、静岡。時代は、大正時代。

この時代の静岡の彼の家では、端午の節句に「柏餅」ではなく、「粽」を食べていたのがわかります。

実は、関東では、室町末期から、端午の節句に、粽ではなく柏餅を食べる習慣があったのですが、この歌詞を見る限り、100年ほど前まで、静岡では粽を食べる習慣が残っていたことがわかるのです。

今は、全国的に、柏餅が粽を凌駕していて、なかなか粽を売っているところが見つからないのが、粽派の私にはちょっと残念に思います。

## 5.6 柏餅の葉

最近では、5月5日の端午の節句に「粽」を食べる習慣は廃れてきて、粽に代わって、「柏餅」を食べる家庭が圧倒的に多くなっています。

もともと、端午の節句に柏餅を食べる習慣は、室町末期から江戸初期にかけての時期に、関東で成立したといわれています。(但し味噌餡)

柏餅が、武家の影響が強かった関東で、食べられるようになったのには理由があります。

ご存じの方も多いと思いますが、柏の葉は、新芽が出ない限り、古い葉が落ちないので、間を開けないで新旧が交代する柏の葉は、後継者が絶えることなく家が続いていくことを最大の課題とする武家の間で、縁起の良いものとして、大切にされたのですね。

柏の名は、炊ぐ葉(かしぐは)からきており、古代から、食べ物を盛ったり、米を包んで蒸すために用いられました。

柏の葉は、極めて強い殺菌作用を有していて、ものを包むのに十分な大きさと破れにくさを持っているため、食べ物を盛ったり、保存したりするのに適していたのです。

これは、中国の「随書」の東夷伝の倭国の条に、倭国では、柏の葉に食べ物を盛って、手で食べるという記述があることから、他の国にも知られていた習慣だったようです。

そういえば、飛鳥時代、蘇我の赤兄の讒言で中大兄皇子に誅された有馬の皇子の歌に

**家にあれば 筥(け)に盛る飯(いい)を 草枕 旅にしあれば 椎の葉に盛る**

というのがありました。筥は食器のこと、椎の葉は「まてばしい」のことですね。

これは、謀反の罪で捕らえられた有馬の皇子が、紀伊白浜に護送中、紀伊藤白坂で松の枝を結んで詠んだ二首の歌の一つ。他の一つは、

**磐白の 浜松が枝を 引き結び まさきくあらば またかへりこむ**

無実の罪を着せられ、もう二度と帰れないことを知りつつ、万に一つの幸運を願った悲痛な心が伝わってくる歌です。

昔、若い頃、磐白の碑を訪れたことがありましたが、国道脇の誰も訪れる者もない寂しい場所でした。

さて、旧暦の5月5日であれば、新しい葉が出て大きくなっている柏ですが、新暦5月5日ではまだ新芽が出たばかり。

残念ながら、この時期に柏の若葉で餅を包むことはかなり難しいと思われます。

このため、少し前までは、前の年に採って塩漬けしてあった柏の葉を使用していたようで

す。ですから、私の記憶では、昔の柏餅の葉は、全て茶色っぽい色をしていたように思います。

ところが、最近の柏餅の葉は、緑色をしているのが多くありませんか？

これ、どういうことなんでしょうか？

これは、私の想像に過ぎないのですが、最近の柏餅の葉は、暖かい外つ国から輸入されているのではないのでしょうか。

とうとう、我が国の伝統菓子である柏餅の葉までが輸入されるようになってきたとは、余り考えたくないのですが、私は、敢えて、調べることをせず、老舗の和菓子店で茶色の葉をしている柏餅を買うことにしています。

ところで、柏餅の中身に当たる餅の形には、よく見るとかなりの差があるのです。

よく見かけるのは、餡を半月形の平たい餅でくるんだものですが、羊羹で有名な虎屋の柏餅は卵形をしています。

ちなみに、下の写真は、最近の青い葉の柏餅



この写真は、老舗和菓子店の茶色い柏餅



右の写真は、虎屋の柏餅。

柏餅 御膳餡  
KASHIWA MOCHI GOZENAN



虎屋さんの言うところによれば、この形が昔からのものとのことですが、例によって、「美味しければ、どっちでも構わない派」の私は、余り気にせずに楽しんでいます。

でも、虎屋の柏餅はなぜか美味しい…。

## 5.8 藤の花

近くの公園の藤棚の藤が満開です。

昨年まで住んでいた仙台には、伊達政宗が朝鮮戦役で持ち帰ったという伝えられる藤が子平町にあり、毎年素晴らしい花を咲かせていました。



藤の花の下で、5月の薫風に吹かれながら本を読んでいると目を上げると、藤の花が風に吹かれる様子を藤波と呼んだ感覚がよくわかります。

藤は、万葉の昔から、人々に大変好まれていたようで、梅、櫻に次いで多くの歌が万葉集に登場しています。

次の歌は、太宰府次官大伴四綱が、太宰府長官大伴旅人に贈った歌。

**藤波の 花は盛りに なりにけり 奈良の都を 思はずや君** (万葉集 3-330)

(拙訳)

(ここ、太宰府でも、藤の花が盛りになりました。この花の紫の色を見ていますと、藤色の衣の袖を吹き返す都の風を思い出しになりませんか。)

ところで、平安の時代のはじめは、今のように、藤棚から下がって揺れている藤ではなく、松の幹に巻き付いた藤の花が風に揺れているのを賞でていたようです。

時代が、古今集の世界に変わっても、藤の花の人気は変わらず、新古今の頃になると、藤はそれまで一緒になっていた松から離れて、単独で、その地位を確立していきます。

次の歌は、新古今集の紀貫之のもの。

**暮れるとは 思ふものから 藤の花 咲ける宿には 春ぞ久しき** (新古今 春の二)

さらに、時代が下って、江戸時代に入っても、藤の花は、日本人の心を強くうっていたようで、元禄4年、旅の途中、芭蕉が大和で詠んだ藤の句は、芭蕉の句の中でも最高の一つ

です。

くたびれて 宿かるところや 藤の花 (笈の小文)

夕闇が迫る頃、藤の花が、旅に疲れた身を慰めるかのように咲いている光景が目の前に浮かんできます。

明治の文豪「島崎藤村」が、芭蕉のこの句から「藤村」という名をつけたことは知る人ぞ知るところです。

ところで、日本原産の藤の花には「野田藤」と「山藤」の二種類があります。

日本で昔から歌に詠まれてきた藤は、「野田藤」の方なのですが、「野田藤」という名前が付いているのは、昔から「吉野の桜 高尾の紅葉 野田の藤」と称されていた大阪福島の野田の藤を植物学者牧野富太郎が「野田藤」と名付けたことに由来します。

二つの藤は、花の形も違って、花が長く垂れ下がっているのは野田藤、ひとかたまりになっているように見えるのが山藤です。

野田藤の蔓は右巻き、山藤の蔓は左巻きですから、皆様のご近所にある藤がそのどちらであるかは、花を見なくてもわかります。

さて、花札では、藤は4月の札。まあ、旧暦4月ですからね。

鳥が描かれているのは、ホトトギス。



ご存じでしたか？

ホトトギスと藤は、古歌にまで出てくる、これまた知る人ぞ知る深い関係。

「立夏4月、既に累日を経ぬれども、なほ、いまだ霍公鳥の喧くを聞かず。因りて作れる恨の歌

あしひきの 山も近きを ほととぎす 月立つまでに 何か来鳴かぬ

(万葉集 17-3983 大伴家持)

霍公鳥は、立夏の日来鳴くこと必ず定まれり。」

大伴家持は、自分で、ホトトギスは、夏の到来を告げる鳥だと説明しながら、「どうしてま

だ来ないんだよ」と文句を言っているんですね。

我が宿の 池の藤波 咲きにけり 山ほととぎす いつか来鳴かむ  
(古今集 詠み人知らず)

と一緒に読むと、よくわかります。

## 5.9 いとしと書いて藤の花

今は昔、平安時代の初めから現在に至るまで、人に愛され、歌に詠まれる花のベスト・スリーは、桜、梅、それに藤。

先日お話ししたように、平安の時代の初め、藤は松に絡みついて咲いているのが良きものとされていたようですが、次第に藤は松から離れ、現在では、藤と松と申し上げても、日本舞踊で「藤娘」を踊ったことのある方などを除いては、ん？という顔をされる方が多くなりました。

ちなみに、

枕草子では

「めでたきもの 色あひ深く 花ふさながく さきたる藤の 松にかかりたる」とありますし、

源氏物語（末摘花）では

「松に藤の咲きかかりて 月影になよびたる 風につきて さと匂ふがなつかしく」とあります。

清少納言さんや紫式部さんが、藤の花房が松にかかって風になよいでいるのを、美しい女性が凛々しい男性に寄りかかっていると見ていたのかどうかは知りませんが、歌舞伎舞踊の「藤娘」などに見られる藤と松の関係は、女と男の関係を表しているようですね。

「藤娘」の踊りで詠われる長唄「藤娘」は、こんな感じです。まずは出だし。

♪ 若むらさきに とかえりの 花をあらわす 松の藤浪

「とかえり」というのは、100年に一度花が咲き、それを10回繰り返すと実が付くと言われる伝説がある古い松のことです。これ、

松が枝に かかるよりはや 十返りの 花とぞ咲ける 春の藤波（新後拾遺 春下 152）

という歌を踏まえたものですね。

続いて、

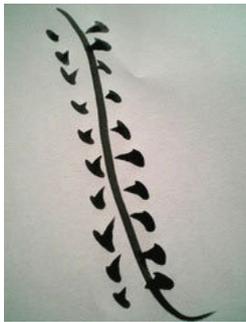
♪ 人目せき笠 塗笠しゃんと 振かかげたる 一枝は  
紫深き 水道の水に 染めて うれしきゆかりの色に

ちょっとややこしくかつ艶っぽくなってきましたが、「人目せき笠」は人目を忍んでかぶる笠。まあ、この娘、人目を忍んで、男のところに逢いに来るんですねえ。

さらに続いて、

♪ いとしと書いて藤の花 エエ しよんがいな  
裾もほらほら しどけなく

「いとし」とあるのは、男をいとしいと思う気持ちで一杯で、裾も乱れるほどなんですね。  
「いとしと書いて藤の花」は、「い」という字を「十(とお)」書いて、真ん中に「し」の字を書けば、藤の花の絵になるという言葉遊び。写真



このあと、藤娘には、自分から離れていく男の心への恨みを、近江八景を詠み込みながら、嘆く「くどき」があり、「ほろ酔い」の「藤音頭」などが入って、「扇」を使った踊りを最後に、遠くから夕べを告げる鐘の音とともに、娘が姿を消して幕が降りるといふものです。

まあ、現在の形の「藤娘」の元の形は、大津絵の絵柄を舞踊にしたものですから、元々はこの娘「藤の精」というより、色っぽい「芸妓さん」に近い風情ですね。

#### 藤かざす 人や大津の 絵の姿 (許六)

ところで、そういう色っぽい部分に水を差すようですが、藤に絡まれた松こそ迷惑。

「とかえり」どころか、実際は幾ら長く生きても松の寿命は 500 年が限度。  
しかも、藤に絡まれるとすぐに枯れてしまうのをご存じですかね。  
まあ、男たるもの、藤のような色っぽい娘に絡みつかれて、我が身を枯らすのも、男冥利につきるといふものかもしれませんが、というつもりかどうかは別として、

#### 物好きに 藤咲かせけり 庭の松 (子規)

まあ、わたくしなど、望んでもそんな機会はありませんでしたがね。

## 5.15 堇の花咲く頃

今朝散歩に出て、近くの丘の登り口に堇の花を見つけました。

色が薄い紫ですから、おそらくは「たちつぼスミレ」ではないかと思います。



日本には非常に多くの堇があるのですが、普通の「堇」が少し赤みがかった濃い紫色なのに対して、「たちつぼスミレ」は、儂い淡い薄紫色をしています。

### 山路来て なにやらゆかし 堇草

というのは、芭蕉の有名な句ですが、この堇草が、「堇」なのか、「たちつぼスミレ」なのか、「堇」という言葉の古来からの使い方をめぐって、かつて論争があったことが知られています。

そのようなややこしい話はさておき、  
春になって、堇を見つけると、私などは自然に

♪ ラララ、赤い花束 車に積んで  
春が 来た来た 丘から町へ  
堇 買いましょ あの花売りの 可愛い瞳に 春の夢

が口をついて出てきます。

この歌、長い間、私、戦後の歌と思っていたのですが、調べてみると、昭和 12 年の日本放送協会の国民歌謡でした。

どうして、戦後生まれの私がこの歌を知っていて歌えるのか不思議です。

ところで、私の悪い癖なのですが、この歌で、可愛い花売り娘さんが堇の花束を売っているのには、疑問を感じたことがあるのです。

どこに？

私の頭の中では、堇は、花を手折るとすぐに萎れてしまうという認識があったのですが、

これは古歌の解説から得た知識。植物学の本からの知識ではなかったもので、半信半疑。

万葉集には、僅かに4首ですが、堇が登場します。

よく知られているのは、山部赤人さんの次の歌。

春の野に すみれ摘みにと 来しわれぞ 野をなつかしみ 一夜寝にける (巻8-1424)  
(春野尔 須美礼採尔等 来師吾曾 野乎奈都可之美 一夜宿二来)

この歌の中の「すみれ摘み」は、古代、春の行事とされていたのですが、それは、堇の花が摘まれるとすぐ萎れてしまうのを、花の命が摘み取った人の魂に移るからだと言われているためというのです。

ところがですね、大学生になってまもなく、マネの「すみれの花束をつけたベルト・モリゾ」の肖像画を見てから、分からなくなっていたのです。

知的で端正な顔立ちの女流画家ベルト・モリゾは確かに堇のブーケを付けているのです。



念を押すかのように、マネは、モリゾに「堇の花束」という作品を捧げています。



ヨーロッパの堇は、手折っても萎れないのでしょうか。  
どなたか、教えていただけませんか。

さて、小生の疑問はさておいて、堇と言えば、宝塚。「堇の花咲く頃」ですね。

♪ すみれの 花咲く頃  
はじめて 君を知りぬ  
君を思い 日毎夜毎  
悩みし あの日の頃  
すみれの 花咲く頃  
今も 心震う  
忘れな君 我らの恋  
すみれの花 咲く頃

でも、この歌、元は、ドイツの歌で「ライラックの花咲く頃」、シャンソンだと「リラの花咲く頃」。

戦前、パリに留学していたある方が、この歌を日本に伝えるとき、「リラ」から「堇」に変えちゃったのですね。ですから、ちょっとだけ、堇の本道から外れるのですが、でも、宝塚の好きな方にとっては、この歌は、切ない初恋の心を堇の花に託して歌い上げたものだと思います。

フランス語の「リラの花咲く頃 (Quand refleurront les lilas blancs)」は、官能的な乙女の心を歌っているものですから、この「堇の花咲く頃」は、やはり日本の歌ですね。

最後に、すみれの歌と言えば、どうしてもモーツァルトを忘れるわけにはいきません。

「Das Veilchen k 476」 これは、ゲーテの詩に、モーツァルトが曲をつけたもの。

豪華ですねえ。

内容は、堇の花が、近くを歩く乙女に摘んでもらいたいと望むのですが、残酷にもその乙女に踏み付けられてしまうのです。それでも、堇は幸せだったというものです。堇クンって、ひょっとしてM？